令和４年度

大阪大学
人文学研究科・文学部　インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学　人文学研究科・文学部

教育支援室

560-8532　大阪府豊中市待兼山町 1-5

令和５年９月

目次

はじめに・・・・・・・教育支援室インターンシップ専門委員（人文学研究科教授）　渡邊　英理　1

演劇学関係インターンシップ概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 人文学研究科教授　永田　靖　2

ピッコロシアターインターンシップ研修レポート
「ピッコロシアター、ピッコロ劇団の取り組みとこれからの演劇」・・・・文学部３年　塩見 さら　3

音楽学関係インターンシップ概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 人文学研究科教授　伊東　信宏　5

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール インターンシップ報告
・・・・・・・文学部３年　杉浦　理彩子・小亀　しほ・平川　萩汰　6
箕面市立メイプルホール　インターンシップ報告
・・・・・・・文学部４年　川勝　千慧・山田　浩人　11

はじめに

本報告書は、令和４（2022）年度に大阪大学文学部および大学院人文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものである。実習先・人数は以下のとおりである。

○兵庫県立尼崎青少年創造劇場〈ピッコロ劇場〉（演劇学）	学部生３名
○あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール（音楽学）	学部生３名
○箕面市立メイプルホール（音楽学）	学部生２名
○京都コンサートホール（音楽学）	大学院生２名

報告書を読むと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れる。学生たちを迎えて指導してくださった受け入れ諸機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成 16 年度から始まるが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは平成 18 年度である。平成 18 年度～令和 4 年度の 17 年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきた。ただし映画関係は 26 年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されていない。

また、令和 3 年度はコロナ感染症拡大によりインターンシップの実施が見合わされる場合があり、本年度についても実施があやぶまれる状況もあったが、複数の機関のご協力を得て、無事に上記の通り、実施することができた。

参考のために、平成 18 年度～令和 4 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておく。

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	計
音楽	5	3	4	2	4	6	6	3	3	3	3	6	0	6	1	2	7	64
演劇	4	4	4	3	2	6	2	4	3	0	3	6	0	3	0	5	3	52
美術	0	0	0	2	2	1	1	1	0	0	0	2	2	1	3	3	0	18
映画	1	0	1	0	0	0	1	4	0	-	-	-	-	-	-	-	-	7
小計	10	7	9	7	8	13	10	12	6	3	6	14	2	10	4	10	10	141

＊単位修得を目的とせずに、インターンシップに参加した学生の数を含む

教育支援室インターンシップ専門委員（人文学研究科教授）渡邊　英理

演劇学関係インターンシップ概要

人文学研究科教授　永田靖

令和４年度の演劇学に関係するインターンシップは、昨年に引き続き兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）に受け入れを承諾していただき、計３名の学生について実施された。これは、２学期開講の演劇学演習「劇場制作研修」として毎年実施しているものである。３名はいずれも文学部演劇学専修の４回生、３回生、2 回生である。以下の報告はそのうちの一人、当時３回生、現在４回生の報告である。

研修に先立って、オリエンテーションを行い、研修の目的や研修先の劇場の概要、研修時に上演される劇団や作品の概略についてレクチャーをした。研修の最終日は当該上演の初日に当てており、演劇学専修のもう一つの演習科目である「観劇実習」の受講者が同劇場にてこの作品の観劇を行うこととしている。この「劇場制作研修」の受講生と「観劇実習」の受講生とが同じ上演に際して劇場内で交差することで、それぞれの関心と理解を相互に向上させることにつなげている。

ピッコロシアターインターンシップ研修レポート

「ピッコロシアター、ピッコロ劇団の取り組みとこれからの演劇」

文学部３回生　演劇学専修　塩見さら

■研修先
　兵庫県立尼崎青少年創造劇場

■研修期間
　令和４年 10 月５日～8 日

■事前研修（10 月３日）

　今回４日間のインターンシップ研修に参加して、ピッコロシアターや同劇団の特徴的な取り組みと、日々の具体的な劇場の業務について学ぶことができた。２つの視点からの学びで感じたことをまとめる。

　はじめにピッコロシアターと同劇団の特徴的な取り組みについて考える。紹介された取り組みの中で特に印象に残ったのが視覚・聴覚に障害のある方の舞台鑑賞に関する取り組みである。音声ガイドや字幕を用いた鑑賞サポートは、すべての人たちに演劇鑑賞の楽しみを味わってもらうために欠かせないものであると感じた。他の劇場、劇団でも同様の取り組みは見られるものの、多くが最近はじまったものであり、まだまだ演劇業界全体に定着しているとは言い難い状況にあると考えられる。地域に密着した劇場であるピッコロ劇場が 2015 年の時点で鑑賞サポートをスタートしたことは、他の劇場への影響力も大きく、障害者の芸術鑑賞水準全体の底上げに貢献したのではないかと思った。また、劇団員が音声ガイドを作っているという点も大変興味深い。正確な情報を伝えることが重要なニュース番組とは違って、演劇では全体の空気感や雰囲気など芸術的な視点から伝えなければいけない。見えている私たちにとって、舞台を鑑賞する視覚障害者の世界を理解し、正確さと一見曖昧でもある芸術的表現のバランスをとった音声ガイドを作ることはとても難しいことだと想像できる。質の高いサポート体制は、障害を理解し求められるサポートを探る劇場側と、作者や演者の意図を汲み取り、芸術性の担保を図る劇団側の協力体制によって初めて成り立つ芸術作品だと感じた。組織自体はそれほど大規模ではないものの、劇場と劇団が密に連携しているピッコロだからこそ可能となった試みではないだろうか。一方、鑑賞サポートに関する具体的な問題点として上がっていたのが字幕表示の方法であった。利用者にとって見やすく快適で、且つ他の観客や演者の邪魔にならず、さらに芸術性を担保できる字幕表示というのは確かに難しい課題であるように思う。他の劇場の取り組みについて調べてみると、「字幕グラス」というものを導入している劇場を見つけることができた。専用の眼鏡を貸し出し、そのレンズ部分にリアルタイムで次々に字幕が表示されるという仕組みである。さらに興味深かったのは、多言語の字幕表示が可能な

点である。聴覚障害者だけでなく外国人の鑑賞もサポートでき、さらに多くの人に演劇鑑賞の機会を持ってもらいやすくできると考えられる。ピッコロ劇場での導入がもし可能であれば、更なる鑑賞環境の向上が見込めるかもしれない。

次に、劇場の日々の具体的な業務について考える。今回の研修で体験した業務はほんの一部であると思うがさまざまに感じることがあった。まず印象に残ったのはコロナの影響である。お客さまの入場の際の「チケットもぎり」「消毒」「検温」には大きな影響があった。通常と比べてスタッフが多く必要となったり、入場に手間取ってしまったりする点で、全体として能率が悪くなってしまっているのを感じた。感染対策をしっかりと実行しながら、もっと効率的に劇場を運営する方法がないのか考えさせられた。特にチケットもぎりに関して、チケット購入や手荷物預かりではスタッフがお客さまと接触している一方で、もぎりのみ接触をなくすことに何か医学的な根拠があるのか疑問に思った。自分でもぎることに慣れておらず、手間取ってしまうお客さまも多かったように感じたので、もぎりスタッフが手袋をつけて対応するなどの工夫も検討できるのではないかと思う。また、チケットもぎり、消毒、検温、パンフレットが密集しすぎていたため、かえって列が詰まる場面も多くなっていたのではないかと感じた。よりスムーズにストレスなく入場できるように、配置にも工夫の余地があるのかもしれない。一方で、スタッフの数に対して客席数、観客数がそれほど多くないことによって細やかな対応が可能になっていることが見てとれた。足の不自由なお客様が来られた際にホール内での階段の上り下りが少なくて済む客席にご案内されていた様子が印象的であった。耳の不自由なお客さまのために急遽台本を読みながら観劇できる客席とスタッフを配置したエピソードからも分かるように、お客さま一人ひとりの様子に目を配り、それぞれにとって快適な観劇環境を提供しようとする姿勢に、事務的な仕事を超えたホスピタリティを感じた。私はピッコロシアターと比べると規模の大きい劇場に行くことが多いが、観客一人ひとりに目を配るという点でこれほど丁寧さを感じることは少なく、小さい劇場ならではの強みの１つではないかと思った。

もう１つ研修で印象的だった、ピッコロ演劇学校、舞台技術学校について考える。今回２つの学校の授業を共に見学し、本物に触れるインパクトの大きさを感じることができた。プロの劇団が実際に使用するホールで劇団員による稽古を受けたり、実際に使用した舞台セットから学んだりできるのは、大きな特徴である。また、学校を卒業した人がピッコロ劇団に入ったりスタッフとして働いていたりしていると知り、人材育成が実際的な成果をもたらしていることが分かった。前にも述べたように、劇場と劇団が密に連携しているからこそ双方の資源と技術を結集して素晴らしい教育環境を作ることができているのではないかと考える。このような取り組みは日本の演劇や文化の発展に大きく貢献すると考えられることから、ピッコロ演劇学校、舞台技術学校を良き先例として全国的にこのような取り組みが広がっていくことを期待したい。

最後に今回学んだことをもとに、これからの演劇について考える。まず、エンターテインメントとして私が楽しんでいる演劇というのは演劇全体のほんの一部に過ぎず、想像以上に多くの活動が展開されていることが分かった。多様性の時代において、さまざまな年齢の人、障害のある人が誰でも楽しめるものを作るということは、容易でなくとも求められることである。先進的で細やかな幅広い取り組みによって、少しずつ劇場に足を運ぶ人を増やし、劇場での人々の共生を社会全体での共生へと広げていくことが、ピッコロに限らず多くの劇場がこれから目指す姿なのではないかと考える。

音楽学関係インターンシップ概要

人文学研究科教授　伊東信宏

音楽に関係するインターンシップは、いずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの３館に受け入れていただいていたが、令和４年度から箕面市メイプル財団（箕面市立メイプルホール）にも受け入れていただくことになった。令和４年度についてはコロナ禍の影響がまだ残っており、いくらか予定の変更を余儀なくされたが、それでもザ・フェニックスホール、京都コンサートホール、そして箕面市メイプル財団で実施することができた。以下にザ・フェニックスホール、および箕面市メイプル財団でのインターンシップについて、受講生からの報告を掲載する。なお、上記のうち箕面市メイプル財団での４回生２名のインターンシップは本来なら 2021 年度に実施されるものだったが、コロナ禍の影響により同年度中に実施できず、箕面市メイプル財団のご協力を得て令和４年度に入ってから実施したのでここに報告をあげている。

以下、インターンシップ関連の出来事を時系列に即してここにまとめておく。

- ◆ 2022年4月の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。学部生4名、院生2名について派遣先を仮決定。
- ◆ 5月12日、13日、14日の3日間、2021年度に実施できなかったインターンシップを、箕面市立メイプルホールにおいて実施（学部４回生2名）。これについては、4月28日に豊中キャンパスにおいて事前説明会、6月14日５限の授業において報告会を行った。
- ◆ 2022年12月1日、2日、6日の３日間、ザ・フェニックスホールでインターンシップ実施（学部生４名の予定だったが、1名が体調不良のため3名での実施となった）。
- ◆ 京都コンサートホールでのインターンシップ（院生2名）は2022年11月に実施予定だったが、ホール関係者の体調不良により中止。2023年1月19日、2023年2月2日、2023年3月4日に実施された。
- ◆ 2022 年１月 17 日（火）、上記のザ・フェニックスホールインターンシップについて、音楽学研究室の総合演習において、受講者３名が報告。その後、報告書の内容について受け入れホールと受講生との間で調整した。
- ◆ 2022年12月に参加できなかった学生1名が2023年6月15、19、20日に箕面市立メイプルホールでインターンシップを行なった（詳細は2023年度版に掲載）。

上記の通り、当初の予定を変更せざるを得ないところがあり、受け入れ各館にはご無理をお願いする点も多かった。受講生を受け入れていただいたザ・フェニックスホール、京都コンサートホール、メイプル文化財団のスタッフの方々に深くお礼を申し上げます。今後も引き続き、よろしくお願いいたします。

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール　インターンシップ報告

文学部人文学科音楽学専修 3 年　杉浦理彩子・小亀しほ・平川萩汰

【研修先】
あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール（大阪市北区西天満 4-15-10）

【研修期間】
2022 年 12 月 1 日（木)、2 日（金)、6 日（火）　計 3 日間

【ホール概要】
開館：1995 年 5 月 13 日
客席：標準 301 席（最大 335 席）
　　ホール 1 階席（建物 3F)：標準 168 席（可動、最大 202 席）
　　ホール 2 階席（建物 4F)：133 席（固定）
構造：乾式浮き構造
天井高：13m

【研修内容】
〈1 日目―12 月 1 日（木）9:30-17:00　@5F リハーサル室〉
9:30　　1 階ロビー集合
9:40-10:00　　①ホール職員紹介(全体朝礼)、学生自己紹介
10:00-11:00　　②ザ・フェニックスホールの概要説明
11:15-12:00　　③ホール案内
12:00-13:00　　昼休憩
13:00-15:00　　④公演準備
　　(公演を実施するまでのオペレーション説明、チラシ挟み込み etc.)
15:15-16:00　　⑤12/2 の公演についての説明、ホールリハ見学
16:15-17:00　　⑥初日のまとめ、感想など

〈2 日目―12 月 2 日（金）9:30-17:30　@5F リハーサル室〉
9:30　　1 階ロビー集合
9:40-11:00　　①ホール内準備
11:30-11:45　　②ホールリハ見学
11:45-12:50　　昼休憩
13:00-16:00　　③公演本番 実務実習
16:00-17:00　　④片付け

17:00-17:30　　⑤公演実施の感想、グループディスカッションの課題説明

〈3 日目―12 月 6 日（火）9:30-17:30　@5F リハーサル室〉
9:30　　1 階ロビー集合
9:40-10:45　　①ホールの制作物について
11:00-12:00　　②貸ホールについて
12:00-13:00　　昼休憩
13:00-15:00　　③12/2 の公演の振り返り、自主企画公演・公演制作業務について
15:15-17:00　　④グループディスカッション
17:00-17:30　　⑤研修まとめ

【期間中の公演概要】
12 月 2 日（金）
公演名：ティータイムコンサートシリーズ 159 高野百合絵（Sop）&黒田祐貴（Br）デュオリサイタル
会場：あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
日時：2022 年 12 月 2 日（金）14:00 開演／13:30 開場
料金：一般指定席 3500 円、友の会 3150 円、学生 1000 円（いずれも税込）
出演者：高野百合絵（ソプラノ）、黒田祐貴（バリトン）、石野真穂（ピアノ）、追川礼章（ピアノ）
曲目：バーンスタイン《ミュージカル『ウエスト・サイド・ストーリー』（1957）より》、《アリアと舟歌》（1988）ほか
主催：あいおいニッセイ同和損保、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
音楽アドヴァイザー：渡邉規久雄
協賛：鹿島建設株式会社、サントリービバレッジソリューション株式会社
協力：モロゾフ株式会社

【研修内容詳細】
〈1 日目〉
　まず、ホールの概要や運営状況、組織体制についての説明を受けた。ザ・フェニックスホールは、旧同和火災の創立 50 周年記念事業のひとつとして、新本社ビルの建設時に、社会貢献活動の拠点として同ビル内に併設された。職員は自主企画公演グループとホール管理グループに分かれて業務を行っている。貸館公演しか行わないコンサートホールも多い中、ザ・フェニックスホールが自主企画公演を行うのは、ホールの目指すイメージを提示するためである。提示したイメージが、貸館公演の内容や性格に大きく影響するのである。また、ザ・フェニックスホールは、基本的にはプロの演奏家のみに貸館をしている。その理由は、利益追求を目的としていないことと、「ハイグレードな室内楽ホール」としてのステータスを守ることの二つである。ただし、ザ・フェニックスホールが重要視すべきことは、質の高い音楽を提供し続け、お客様からの信頼を得ることだけでは不十分だ。予算確保のためにも、あいおいニッセイ同和損保の社員の方々にホールの価値を認めてもらうことも重要である。

そのため、社員向けのファミリーコンサートを実施したり、公演を紹介する記事には「あいおいニッセイ同和損保　ザ・フェニックスホール」というようにホールの正式名称を記載し、ホールによる会社の宣伝効果をアピールしたりしている。

その後、館内の案内をしていただいた。館内には、ホール開設時に旧同和火災取締役社長として指揮をとられた現館長の岡崎真雄氏によって精選された、音楽をテーマにした絵画や彫刻が飾られており、気品あふれる空間となっている。

午後からは、自主企画公演について説明を受けた。自主企画公演には、国内外で活躍する世界トップレベルの演奏家を招く「注目アーティストシリーズ」、午後のひとときにお茶やお菓子とともに音楽を楽しんでいただく「ティータイムコンサートシリーズ」のほか、リベラルアーツへの注目とともに人気が上がっている「レクチャーコンサートシリーズ」や、発表の機会に恵まれない若手演奏家を中心に公募し、ホールを無料で提供する「フェニックス・エヴォリューション・シリーズ」等計 7 つのシリーズがある。各シリーズの公演は、音楽事務所や音楽学者などから企画を提案され、企画がスタートすることもあれば、ホールの職員の方が注目しているアーティストや作品を起点に企画されることもある。自主企画公演グループの職員の方は、普段からコンサートに頻繁に足を運び、コンサートの感想などを職員同士の雑談のなかで共有し、優れたアーティストの情報などを積極的に収集しているという。（杉浦）

〈2 日目〉

インターンシップ 2 日目の中核をなすのは、リサイタル公演である。同公演はクラシックコンサートをエンタメ化するというコンセプトのもとで行われた。企画担当者によると「クラシックのエンタメ化」は同ホール史上初の試みであり、長年の目標だったそうだ。

1 日目と同様、一階ロビーに集合したのち、ホール内の準備に取り掛かった。公演という場に相応しい格好となるよう、インターンシップ生も皆スーツを着用し臨んだ。会場設営と最終打ち合わせをした。可動式受付台の設置にはじまり、公演ポスターの張り替えも行った。レセプショニスト（受付案内係）との最終打ち合わせの見学もした。開場・開演時間に加え、チケットの扱いや物販場所、お菓子・ドリンクの配布についても確認した。さらに、開演時間を超過して来場した方への対応についても念入りに確認した。

次にリハーサル見学を行った。自由に席を移動することができたので、位置による音響の違いを体感できた。出演者は和やかな雰囲気のなか私服でリハーサルをしており、入退場やトーク内容、演出の仕方について確認していた。そして本番、インターンシップ生は公演開始時に舞台袖を見学したのち、ホール内（2 階席 BB 列 45,46,47 席）で鑑賞した。リハーサルとは一変し、舞台裏には緊張感があった。ホール内の聴衆、受付・案内係の様子、照明や遮光壁の動きなど、様々な角度から見学できた。

公演後、来場者にお菓子を配布しながらお見送りした。一階ロビーにて行われた物販やサイン会の様子も見学できた。観客の退場後、ホール内の可動式の椅子を定位置に戻し片付けた。最後に、職員と出演者の方々に対して、公演に携わった感想を述べる貴重な機会をいただいた。準備・本番・片付

けと密度の濃い一日だった。鑑賞だけではなく企画運営という裏側からも体験でき、特別な公演となった。

その後最終日のグループディスカッションの説明を受け、2 日目を終えた。（小亀）

〈3 日目〉

3 日目は最初にホールの制作物についての説明を受けた。ホールの制作物とは、年に 6 回、奇数月に発行される情報誌「Salon」や、公演のチラシを指す。「Salon」の内容は巻頭インタビュー、チケット発売情報、ピックアップ公演の情報、その他特設ページ、裏表紙のエッセイで構成されている。主にザ・フェニックスホール友の会の会員向けに作られており、会員の自宅に郵送している。他にも関係者や教授にも送付し、余ったものはチラシと同様にホールに置いておくとのことだった。現在の友の会会員数は 888 名で、発行部数は 1700 部となっている。情報誌と同時進行で公演のチラシも作成する。チラシのデザインは一貫して大阪芸術大学の松井桂三さんに依頼しており、ホールの方は公演のイメージや要望を正確に松井さんに伝え、集客力のあるチラシを目指している。有名な演奏家は顔をチラシに印刷するだけで十分に売れるものになる一方で、現代音楽等の集客が見込みづらい演目では人の目を引くチラシのデザインがより重要になっていくとのことだった。チラシは 10000 枚刷り、公演のパンフレットに挟んだり、ホール内に置いておいたりする。

次に貸しホールとしてザ・フェニックスホールがどのように使われるのかを、実際に利用者が記入する使用計画書を用いながら確認した。必ずピアノを調律してから演奏してもらう、というホールのルールや、実際の公演のスケジュールの組み方とそれに応じた貸出時間区分の使い方を知ることができた。特殊な照明や PA 席の有無で所要時間がかなり変わり、その準備のために貸出時間が長くなることも多いようだった。また、ホールにあるピアノはスタインウェイとヤマハの 2 つだが、特殊奏法はヤマハのものしか認めていないとのことだった。

午後は 2 日目に行われた公演の振り返りとグループディスカッションを行った。ディスカッションというよりは率直な意見交換会という雰囲気で、ザ・フェニックスホールの顧客のニーズや、新規顧客の需要、クラシックアーティストの実態、クラシック音楽に抱いているイメージ等様々な意見を交換した。（平川）

【所感―3 日間を終えて―】

今回、支配人や自主企画公演グループ・ホール管理グループの職員の方々のお話を伺い、「損保の社会貢献活動の拠点としてどうあるべきかを意識して、ザ・フェニックスホールは運営されている」ということが分かった。筆者はこれまで、数多あるコンサートホールの違いとして、会場の規模くらいしか認識していなかった。しかし、インターンシップを通して、ザ・フェニックスホールが、保険会社の運営であることから発生する制約を抱えながらも、ホールの運営上・構造上の特長を生かして、収益性や大衆性だけでなく芸術性や学問性を重視した魅力的なコンサートを企画運営していることを実感した。私たちが多種多様なコンサートを楽しむことができるのは、様々な運営体制のコンサートホールが、それぞれの困難を抱える中で、それぞれの理想のコンサートを追求しているからであろう。

また、研修中、「コンサートの企画の際、芸術性・学問性と収益性・大衆性のバランスをどうとるのか」「社会にとってクラシック音楽は本当に必要なのか、疑問に思ってしまうことはないのか」等クラシック音楽のあり方について、音楽を届けるプロであるホールの職員の方々に質問できたのは、非常に貴重な機会であった。職員の方々は皆、来客数等の現実的な問題に冷静に取り組みながらも、生の音楽の価値を信じて業務に取り組まれているのが伝わってきた。今回のインターンシップの経験を活かして、クラシック音楽の理想的なあり方について今後深く考えていきたい。（杉浦）

三日間とはいえ、とても密度が濃く充実した体験ができ、公演だけではないザ・フェニックスホールの一面が垣間見えた。

まず内装のすばらしさに圧倒された。たとえば 16 分割の昇降床によるアダプタブル方式の舞台や開閉式の遮光壁である。遮光壁を開放した際の眺望の良さにも感動した。また、バックヤードも窺い知ることができた。地道な業務体験やリハーサル見学などをしたり、企画運営する側の企画コンセプトや想いを伺ったりし、公演をおこなう大変さを痛感した。本番の演奏も含め、公演が公演として立ち上がっていく過程に立ち会うことができうれしかった。ひとつの公演に掛かる労力・時間・費用を実感する貴重な機会だった。

現在、コロナ禍で閉館を余儀なくされた館もあり、音楽ホールはじめ文化施設は新たな局面を迎えている。余暇や贅沢として二の次になってしまいがちな音楽ひいては文化の拠点の維持が課題である。同ホールも SNS や広報誌を通してこれまで以上に発信し、社内外に向けて活動の輪を広げようとしている。

同ホールを訪れるのは初めてだったが、インターンシップを通してまるで以前から馴染みがあったかのような愛着あるホールになった。是非また演奏を聴きに訪れたい。同ホールのファンのひとりとして、その魅力を積極的に周知し輪を広げていきたい。（小亀）

今回のインターンシップを通して現場で働いている方々の話を聞き、音楽を商品として扱う大変さについて実体験することができ、貸しホールの運営の仕方の実態を知ることができた。音楽を提供する側の視点を少しでも理解できたことで、音楽業界に対する理解や、今自分が行っている音楽活動がどのように社会に影響を与えるかについて、より広い視野で考えられるようになった。

正直もうからないという自主企画公演を行う意義や、親会社との関係性は初めて気づくことが多く、大きな学びだった。ホールのブランディングへの強い意識は企業に所属するホールだからこその視点で、公共ホールにしかなじみがなかった私には新鮮だった。

そして、何より仕事について熱心に取り組んでいる方が多く、今回関わらせていただいた自主企画公演にも、クラシックのエンタメ化というテーマの下で自分のやりたいことと世間のニーズをすり合わせながら満足するものを作り上げようとされている姿がとても印象に残った。自分のやりたいことがいつでもできるわけではない状況下で、いかに工夫して音楽の面白さをお客様に提供できるかを考えながら、公演や制作物を作り上げる仕事はとても面白そうだった。（平川）

箕面市立メイプルホール　インターンシップ報告

文学部４年　川勝　千慧・山田　浩人

【研修先】
公益財団法人箕面市メイプル文化財団

【研修期間】
2022 年 5 月 12 日（木）～5 月 14 日（土）

【研修場所】
〈1 日目・2 日目〉
・箕面市立メイプルホール／箕面市立中央生涯学習センター
所在地：〒562-0001　大阪府箕面市箕面 5-11-23
　メイプル文化財団がホールと生涯学習センターの両方の管理運営を行っていることから、1 つの建物がその両方の側面を反映した２つの部分に分かれている。メイプルホールとしては大・小のホールとリハーサル室、生涯学習センターとしては講義室や会議室、音楽室、工芸室などさまざまな部屋を備えている。１日目の講座が行われたのはメイプルホール小ホールで、定員 100 人のプロセニアム形式のホール。
〈3 日目〉
・箕面市立文化芸能劇場　大ホール
所在地：〒562-0035　箕面市船場東 3-10-1
　2021 年 8 月 1 日に開館。指定管理者は株式会社キョードーファクトリーが運営する PFI 箕面船場まちづくり株式会社。大・小ホールとリハーサル室を備える。3 日目の公演は箕面市メイプル文化財団が主催し、大ホールで開催された。
　大ホールは１階 935 席、２階 466 席の計 1,401 席を備えるプロセニアム形式のホールで、箕面の大滝をデザインモチーフとしている。

【研修最終日の公演】
公演名：身近なホールのクラシック　京都市交響楽団特別演奏会
日時：2022 年 5 月 14 日（土）15:00 開場、15:30 開演
会場：箕面市文化芸能劇場　大ホール
出演・演目：
三ツ橋敬子指揮（当初予定のパスカル・ヴェロから変更)、京都市交響楽団
モーツァルト　歌劇「フィガロの結婚」序曲
モーツァルト　交響曲第 31 番ニ長調「パリ」
ベルリオーズ　幻想交響曲

料金：一般 4,000 円、フレンド会員・団体 3,600 円、大学生以下 1,000 円
主催：公益財団法人箕面市メイプル文化財団
後援：箕面市／箕面市教育委員会
広報協力：仙台フィルハーモニー管弦楽団

【研修日程】
〈第 1 日〉5 月 12 日（木）午後 3 時～午後 9 時　於メイプルホール
15:00　レクチャーと質疑応答
17:00　休憩
18:00　講座準備
18:30　講座受付
19:00　生涯学習講座「幻想交響曲の魅力」
　　片付け、解散
〈第 2 日〉5 月 13 日（金）午後 1 時～午後 5 時　於メイプルホール
13:00　インタビュー準備
14:00　伊東先生インタビュー立ち会い
15:00　レクチャーと質疑応答
〈第 3 日〉5 月 14 日（土）午後
13:30　京都市交響楽団特別演奏会　現場研修

【研修内容詳細】
〈第 1 日〉
　箕面市メイプル文化財団が指定管理者として管理・運営している市民文化ホールと生涯学習センターや「地域密着」とはどういうことかについて、和田大資さんにレクチャーを受けた。箕面市メイプル文化財団は市民文化ホールと生涯学習センター、合わせて 5 つの拠点を持っていることが強みになっているという話を伺った。文化と生涯学習の 2 軸を併せ持つことにより、「地域密着」と「文化振興」の相互作用を可能にしているのだと話されていた。ホールは吹奏楽やピアノの発表会といったイベントの際に使用するため、年に 1 回など頻度が低い。しかし、生涯学習センターは習い事で使用するため、週に 1 度など頻度が高い。毎週習い事をして、年に一度ホールで発表するという結びつきが生まれる。つまり、窓口と利用者である住民との信頼関係を日頃から構築しているため、コンサート等のホールの企画をした際もお客様が来てくれるのだと分かった。箕面市立中央生涯学習センターでは、年に 72 回生涯学習講座を開講している。健康体操や親子でホタルを見る会、身近なホールのクラシックなど生活に密着した企画が盛りだくさんだ。これは、地域の特徴を知り、地域住民の価値観を知ることで成立している。また、池田市のアゼリアホールの方がチケットの委託販売をしているところにも立ち会い、隣接する市と一緒に地域の芸術・文化を発展させようとしているところを目の当たりにした。
　次に、生涯学習講座のための準備をした。指揮者変更（コロナ陽性が発覚し来日できなくなった

パスカル・ヴェロ氏の代わりに、三ツ橋敬子氏が指揮をすることになったため）のお知らせや、三ツ橋氏のプロフィール、アンケートやプログラムを印刷し、配布資料に挟み込む作業や、コロナ対策のアルコール設置、座席の配置などを経験した。

講座が始まる前には、受付に立ち、検温やアルコール消毒を促したり、資料を配布したり、（当日は雨だったので）傘立てに傘を入れるよう声掛けをしたりした。参加者は高齢の方がほとんどで、指揮者変更や雨天のため参加をキャンセルされた方もいらっしゃった。講座終了後に参加者の一人に話しかけられた。その方は、「クラシック音楽なんて難しくてわからん思てたけど、すごくわかりやすかったわぁ。私毎回こういう講座参加してるんやけど、ほんまに居心地良いし、またよろしくね」と仰っていた。アンケートを見ると好評で、和田さんがレクチャーで仰っていた「地域住民とのつながり」や信頼関係は確かに強く結ばれているのだと実感することができた。

〈第 2 日〉

2 日目は、インターネット音楽メディア Freude・音楽評論家八木宏之さんによる伊東先生のインタビューに立ち会った。このインタビューは 2022 年から 2024 年にかけて開催される《身近なホールのクラシック》ブラームス交響曲全曲演奏会のプロモーションのために行われたもので、地域密着や箕面市のクラシックの取り組みについて伊東先生にインタビューをするというものだった。地域の文化ホールが果たす役割とは何か。大阪と東京との公演内容の違いなど 1 時間ほど八木さんのインタビューに立ち会った。その中で印象的だったことが 2 つある。 1 つ目は、箕面市メイプルホールが斬新な企画を打ち出せる理由だ。メイプルホールは会場のキャパシティが 500 人のため、斬新な企画でも観客が入ることを見込んで実行することができるらしい。第 1 日目に和田さんから伺った「生涯学習」や「地域の人々との結びつき」、「自分の特徴を知る」ことが直結しているのだと分かった。また、2 つ目は「若者はクラシック音楽を聴かない」という話題だ。クラシック音楽のコンサートに行くのは高齢者だけで、若者はほとんどいない。クラシック音楽はなぜ衰退したのか。また、現在に適した形で文化が広がるにはどうすればよいのかを話し合っていたのが印象的だった。

和田さんによると、Freude という音楽メディアに掲載しようと思ったのは「若い世代の人に発信したいから」だという。インターネットメディアで、クラシック音楽を広めようと奔走している若い人たちの力に期待してみたい。また、坂入健司郎さんや石上真由子さんなど、若い演奏家を起用することで、「若者の力」に期待したいと仰っていた。また、若者に対して、手の届く範囲でクラシック音楽の素養を丁寧に、一緒に耕していかないとクラシック音楽はいつか途絶えてしまう、という危機感が伝わった。

「生涯学習センターは地域の居場所になるのか」と質問した際に、小中学生までは習い事で来てくれるが、高校生から 50 歳ごろまでの若者・青年・現役世代は地域社会に参加できていないと嘆いておられた。だからこそ、その世代が何を求めていて、どのようなことを展開すれば来てくれるのか、苦戦していると話されていたのが印象的だった。

〈第 3 日〉

川勝は就職活動のため欠席し、山田がひとりで活動した。

会場に集合後説明を受け、受付を抜けてすぐの机上に置かれた演奏会のパンフレットを取っていただくようお客様に声をおかけする仕事を担当することになった（なぜ直接手渡ししないのかを聞きそびれてしまったが、コロナの感染対策と単に人手が足りないからだろうかと考えた）。それからお客様に聞かれたときに備えて会場を歩いて全体を確認した。ホールへの入り口は複数あってそれぞれに数字がつけられており、お客様はチケットに記されたその数字の入口から入場することになっていたり、お手洗いが奥まった場所にあったりと、お客様にとっては多少わかりにくい部分もあるように感じた。

開場し声かけを始めると、お客様の中にはチケットもぎりを済ませるとパンフレットに気づかずホールの中へ向かってしまう方もおり、声かけが役に立っていると感じた。またこちらから挨拶すると返してくださる方も多く、地域の皆さんの温かさに触れることができた。客層は高齢の方が多かったが、親子連れや制服姿の学生などもいくらか目にした。開演後はホールの中で演奏を聴かせていただいた。休憩時はドアの開け閉めなどを少しお手伝いし、終演後にはお客様のお見送りをし、インターンの活動は終了となった。

【全体の感想】

市民文化ホールや生涯学習センターが地域住民とどのように関わっていくのか。また、地域密着とはどのようなことなのかを考えることができたインターンシップだった。このインターンシップのなかで、お話しして下さった和田さんが何度もおっしゃっていたことは、「自分の地域の特徴を知る」「自分の専門性を知る」ということだった。地域にある文化ホールはコンサートホールと異なり、主に、その地域の住民を対象にしている。誰に向けてどのような企画を打ち出すのか。そのためにどのように関係を構築していくのか。そういったことを真摯に考え続けていらっしゃるのだなとわかった。だからこそ、生涯学習講座に参加された地域の方があたたかく声をかけてくださったり、話しかけてくださったりする素敵な空間が生み出されるのだと考えた。また、クラシック音楽に対して専門性を持っている和田さんだからこそ、「チケットが売れそうな曲」というオーダーや、有名な作品だけでなく、新しくて面白い企画が打ち出せるのだと理解した。私がこのインターンシップの中で印象に残った言葉は「手の届く範囲で一緒に、丁寧に土壌を耕す」という言葉だ。音楽の専門性を持っている職員の方が、面白がって新しい企画を提案する。そこに、常日頃から地域コミュニティの中に参加できている市民の方々も一緒になって参加する。そういう信頼関係（あるいは一緒に「おもろいこと」を楽しむ共犯関係とも言えるかもしれない）が構築されている背景には、生涯学習セミナーなどで少しずつ「一緒に」新しいことに対する好奇心を育ててこられたことがあったのだなと感じた。生涯学習と文化振興の２つを軸に、これからも箕面では、「ここでしか楽しめないもの」がたくさん生み出されていくのだろうと羨ましくなった。

２日間という短い間でしたが、とても素敵な経験をさせていただきました。箕面市メイプル文化財団の和田さんをはじめとした職員の方々、伊東先生、地域の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。（川勝）

箕面市メイプル文化財団様が進める文化振興と生涯学習の両輪からなる活動の一端に関わったことは、普段は単なる聞き手や演奏者として、また音楽学の学生として触れてきた音楽について、違った側面から考えてみる貴重な機会となった。講座や演奏会での活動のなかでは地域の皆さんとわずかながらも触れ合い、こういった音楽関係の催し物が地域の交流の場としての役割を担っていることが肌で感じられた。「フロイデ」の八木さんによる伊東先生へのインタビューでは、大学の中からはあまり見えてこなかった、音楽学という学問の場と地域のコミュニティをつなぐような知のあり方を窺い知ることができた。コロナ禍により従来の受入先でインターンシップが行えなかったなか、新たな受入先を探してくださった伊東先生と、受け入れてくださったメイプル文化財団の和田さんに感謝いたします。

インターンという特殊な立場で演奏会を鑑賞していると、他のお客様の演奏への反応のような、いつもはあまり関心を払わない部分に注意が向いた。そこで改めて感じたのが《幻想交響曲》のようなかなり過激な音楽が演奏されていても、客席では身じろぎひとつせずに鑑賞すべきだという、コンサートホールという場にそなわった強力なコードである。私たちはこのコードに慣れ切ってしまっており、実際に苦もなくそうして鑑賞することができる（それどころか、他の人にもそれを強いるような視線を向けさえする）のだが、これは西洋芸術音楽の歴史にとってもとくに自明なわけではない。たとえばモーツァルトは今回演奏された《パリ》について、その地で初演された際に聴衆が演奏中にとった鋭い反応や拍手喝采の様子を記している。

私たちは、仮に許されていたとしてももはや演奏中に拍手喝采などしないかもしれない。しかし、コンサートホールが私たちに強いる鑑賞のあり方が、かえってその場で音楽が生み出しうるものを殺ぐことになってしまっているのではないか、というのが私の抱える疑問である。斜に構えた考えかもしれないが、コロナ禍において「生」の音楽を手放さざるを得なかった時期を経た今、このようなことをもう一度立ち止まって考え直してみる必要があるのではないかと考える。（山田）